

〈書 評〉

マリオ・バルガス＝リョサ『若い小説家に宛てた手紙』

(木村榮一訳 新潮社 2000年 176頁)

片 倉 充 造

翻訳物の「文学書」と言えば、古くは、L. T. ディキンソン『文学研究法』(上野直蔵訳, 南雲堂 1969年), アルベール・ゲラルド『世界文学序説』(中野好夫訳, 筑摩書房 1974年)から、ミハエル・バフチン『小説の時空間』(北岡誠司訳, 新時代社 1987年), ジョナサン・レイバン『現代小説の方法』(青木健・斎藤九一訳, 彩流社 1988年), ジェルジ・ルカーチ『小説の理論』(原田義人/佐々木基一訳, 筑摩学芸文庫 1994年)他まで, その書名を列挙することができるだろう。名著も見受けられるが, 多くは原著での記述が精緻なあまり, とかく難解な書物に仕上がっている弱点も隠しきれない。

本書はいわゆる《ラテンアメリカ文学ブーム》の代表的な担い手の一人であり, 華麗で多作, 豊かな文才をイメージさせるマリオ・バルガス＝リョサによる, 1997年に発表された12章構成の小説作法である。しかも“私”がある若い小説家(un joven novelista)に価値ある作品創りを指南する書簡形式には, 柔らかさが漂い, 読者をその深遠な中身へと誘ってくれる。

それでは順次主な章を取り上げ, 検討を加えたい。

「第一章サナダムシの寓話」では, “文学が弱い国”の嘆きを述べるとともに, ダイエットのためにはサナダムシをも丸飲みした19世紀貴夫人の苦悩になぞらえて, 「書くことこそ自由の実践」(p. 14)や「書くために生きる」(p. 16)など, 作家を天職とする者の過酷なまでの心構えを強調している。それは文学のために刻苦勉励する, 自己犠牲すら厭わないまるで求道者の威風である。「小説家の場合, 才能, 天分といったものは気の遠くなるほど長い時間, つまり何年もの間粘り強く修練を積んではじめて身につくものなのです」(p. 18)は, そっくりそのままスペイン黄金世紀の文豪セルバンテス『ドン・キホーテ(後編)』(1615)の序文「人は白髪でものを書くのではなく, 理性によって書くのであり, 理性は歳とともにいっそう円熟するのがつねである」(牛島信明訳, 岩波書店 1999年)と重なり合っている。

「第二章カトレブレパス」の「テーマというのは小説家が選び取るのではなく, テーマが小説家を選ぶ」(p. 22)や「人生がテーマを押しつけてくる」(p. 24)などは, 社会的情勢の厳しい“文学の弱い国”出身でもあることの体感(諦観)ではあるが, 著者はテーマ以上に作品の構造や意匠・技法の大切さを主張してやまない。

また「第四章文体」では, 小説家になること＝一貫性と必然性を備えた文体を身につけるとし, 「自分の文体を見つけ出すこと＝すぐれた文学書をたくさん読むこと」(pp. 46-47)と喝破する。さらには19世紀フローベルの例を引き, よい文章を書くコツとして, 下書きの読み上

げを奨めている。評者も本章には全面的に賛同を寄せる次第である。読書（体験）の蓄積や音読での検分がなければ、読み手が文意を滑らかに理解することは困難である。逆にそれが伴うことこそ文章力上達の秘訣なのであり、著者の文学に対するひたむきさが表出した提言である。日本でも、若者の活字離れが憂慮されて久しい昨今であるが、一つの漢字がしっかり読めないことは、もはや単なる笑い事で済まされるべきことなどではなく、一語一文の不理解は、段落の文意を把握できずにやり過ごしてしまいかねないのだ。母（国）語の読解力が乏しいままで、さらに何を学習できるのだろうか？ もっと国語学習を大切にしてほしいものだと言文学の徒であれば、思わざるをえない。

「第五章語り手。空間」では、やはりフローベルの理論を引用し、「読者に自分はいま誰かが書いたものを読んでいると意識させずに、小説自体に備わる内的必然性にしがたって目の前でどんどん自己増殖していくように思わせること」がフィクションの成功と説明する。映画にせよ、テレビにせよ、演劇にせよ、音楽にせよ、スポーツ観戦にせよ、こうした対象を巻き込み、集中力を高めさせる没入感の迫力は、作品（興業）の説得力・魅力に他ならない。「真実が作品からにじみ出してきてこそ、本当らしく見える」（p.64）ことは、生理的限界を持った生身の人間たちの“対話”が多用されるフェルナンド・デ・ロハス『ラ・セレスティナ』（1499年）や『ドン・キホーテ』（1605/15年）の作品世界のリアリティを補強していることになる。

「第六章時間」では、「すぐれたフィクションはわれわれ読者が生きている現実的な時間とは異なった固有の時間体系をもっている」（p.71）という見解は、『ラテンアメリカ文学ブーム』の導入役を果たした近現代フランス文学の研究者福永武彦『20世紀小説論』（岩波書店1984年）の主旨、「20世紀のすぐれた小説家は、常に作中の時間を意識し、また時間に反逆した。小説は色々の書き方を持ち、その方法や手段はさまざまある」を彷彿させる。機械時計によって刻限される外的・客観的時間への19世紀的追従からようやく解放され、内的・主観的時間をどう取り扱うかが作品の成否にかかわる、小説家の力量が問われる大きな課題なのである（川端柳太郎『小説の時間』朝日選書1978年参照）。

「第九章入れ子箱」は、面白い。「語り手の（時間的・空間的・現実レベルの）転移（＝移動）を通して、物語の中にさまざまな物語を挿入」（p.115）する好例として、『千一夜物語』を掲げる。そして『ドン・キホーテ』のシデ・ハメテ・ベネンヘリが物語の外側にいる語り手でありながら、叙述世界に介入し一人称で発言したり、全知の語り手によって引用・言及される矛盾を、〈語り手－登場人物〉と見解するのは、首肯できる。

「第十章隠されたデータ」では、「データを隠したり、意図的にあることを伏せたまま物語る、語り手の沈黙には意味が込められている」（p.123）と述べ、推理小説のように一時的に隠されたデータを〈転置法〉、そして決定的に隠され、永遠に消去されたデータを〈省略的〉と規定するが、騎士ドン・キホーテの前身＝郷士アロンソ・キハノは、P. E. ラッセル『セルバンテス』の指摘どおり、“前歴省略”の典型的な類例と呼べるだろう。

「第十一章通底器」では、「ちがった時間、空間あるいは現実レベルで起こる2つないしは

それ以上のエピソードが語り手の判断によって物語全体の中で結び合わされること」(p. 137)が通底器(原語では, Los vasos comunicantes)であると著者は解説し、フローベリアンとして『ボヴァリー夫人』(生島遼一訳新潮社他)をその代表作と教示しているが、これはまさしく北部海岸都市ピウラとアマゾン流域の密林の村サンタ・マリア・デ・ニエバ、つまりペルーのコスタとモンタニャを5つの挿話で有機的に総合させたあの名作『緑の家』(1966)に結実していることに、疑念の余地はない。この技法は、『都会と犬ども』(1963)以降リョサがその主要な作品で一貫して追求・洗練してきた創作課題でもある。

「第十二章追伸風に」では、原作を超える批評は基本的にありえないので、手紙の書き手は依頼者に、思い切って小説創作の実践を試みるよう切望する。これは何よりも実践の厳しさ、その重みを知る文学の“求道者”ならでの叫びである。

ラテンアメリカ人バルガス＝リョサの気概は、およそ《ラテンアメリカ文学ブーム》に凝縮されており、その盟友たちへの賛辞を惜しまない。“文体”では、短編集のJ. L. ボルヘス(アルゼンチン)やG. G. マルケス(コロンビア)『百年の孤独』，“時間論”では、ボルヘスに加え、フリオ・コルタサル(アルゼンチン)『石蹴り遊び』，“現実のレヴェル”ではアレホ・カルペンティエル(キューバ)『この世の王国』，“質的転移”では、コルタサルとフアン・ルルフォ(メキシコ)『ペドロ・パラモ』、そして“入れ子箱”ではフアン・カルロス・オネッティ(ウルグアイ)『はかない人生』など、壮大な作家・作品群が紹介され、これが世界的名作M. プルースト『失われた時を求めて』、ハーマン・メルヴィル『白鯨』、F. カフカ『変身』、J. ジョイス『ユリシーズ』、J. スタインベック『怒りの葡萄』、フローベル『ボヴァリー夫人』その他と併置・検証されている。コロンビア出身にして世界的規模で活躍する、豊満な筆致の芸術家フェルナンド・ボテロは、「私にとって絵画とは、ある様式に従い詩的な作品を作りだすことを意味する。過去のすぐれた芸術家たちはみなそれぞれ独自の様式で現実を画像に置き換えてきた」とその創作論を披瀝しているが、これはまさしく「現実の詩的な転移」を標榜するマルケスのそれといみじくも符合する。リョサもこの美術家の“ラテンアメリカ性”を大いに賞賛し、「ラテンアメリカが長年にわたりつくりだしてきたものは、ヨーロッパ的なものに対する受容と拒絶の奇妙な関係の中から生まれている」と総括する。してみると《ラテンアメリカ文学ブーム》とは、「スペイン語圏ラテンアメリカ文学の国際化」とよく評言されるものの、スペイン・ヨーロッパと中南米との文化的統合による文学刷新ということになるのだろうか？

最後に、翻訳による「文学書」でありながら、読者に違和感を与えず、むしろ和書での文学論(伊藤整『小説の方法』新潮文庫1957年、中村光夫『小説入門』新潮文庫1959年、中野好夫『文学の常識』角川文庫1961年、丹羽文雄『小説作法』角川文庫1969年、中村真一郎『文章読本』新潮文庫1982年、金井美恵子『小説論』岩波書店1987年その他)に近い作風は、著者熟達の筆法と訳者のやはり錬成された翻訳技術の成果であることを付言しておきたい。それほどまでに親しみやすく、わかりやすい小説概論なのである。

